

をもて帽子、前掛等を切り居たり、店臺を終りし

時藤田さんは引出しを作らんとせしかど、何物をも代用すべきものなきを見て「先生引出シガ入ルケレドモ、如何シマセウカ」と、保母は戸棚の引出を用ふべく示せば大喜びにて是を用ひたるに、適當なる店臺出來たれば、其引出に紙、筆、鋏等入れて客待顔に座し居たり。

二、三の組の幼兒は店の遊の興味あるを見て

帶、羽織を求むべく来る。

藤田さんと景ちやんは番頭となりて客を歓迎す藤田さんは反物の丈を計らんとして、尺なきを見て指を尺の代用として計りたり、隣室にて積木にて遊び居たりし女兒は店に入り來り「私等ハネ、此内ノ伯母サンヤ姉様ニナツテ著物ヲ縫ツタリ、御飯ヲ煮タリシマシヨウ」と云ひて、室内の掃除飯事等して遊び愈々盛に進行せり。

## 『菊ちやんの舞踊會』(二)

英文學に現はれたる子供(三十三)

岡田みつ

スミス夫人が、食卓の主人役を勤めるしたり顔や、少々の失策があつても平氣で居る様子は誠に可愛らしかつた。大事のバイを切り分ける拍子にナイフが鈍なまけなので床ふかへバイが跳ね飛んだり、御客が情なさけない程早くパンとバタを頬張つてしまつたり

態々用意したブリキの匙で食べてもらう筈のカスタードが、ズル／＼飲まねばならぬ様に柔かであつたりした。

スミス嬢は、侍女のベッスちやんと御菓子ごかしの奪ひ合をした爲ベッスちやんは御皿ごと御菓子ごかしを四

方へぶちまけて、ワッと泣き出して仕舞つた。やうやう食卓に付かせて御砂糖壺をあてがつて和め賺してゐる内に、小饅頭の入つて居た大皿が紛失して、影も見えなくなつた。このバチは、今日の御馳走の重なるものでスミス夫人が自身手を下して作つたわけ故、夫人が怒るまい事が非常の立腹で、

「あなたが隠したのよ、トムさん。私知つてゐるワ」

とミルク入れをふり翳して、怪いと見た御客に通つた。

「僕ぢやありません」

「あなたよ」

スミス嬢は、騒ぎの中で、大急ぎにジュエリーを食べ盡しながら、

「口答へするのは失禮ですよ」と言つた。

「返してやりたまへデミ君」とトムがいふと、デミは濡衣を著せられて、立腹し、

「偽言つくない！ 君は、チャント自分のかくし

に入れて居る癖に。」

「出させてしまふではないか。菊ちやんを泣かせちや悪いや。」とナットが言ひ出した。

菊ちやんは泣いて居た。ベッスも御主人思ひの女中と見えて、奥さんと共に泣いて居ると、スミス嬢は、男の子はほんとに厄介物だと罵つて止まなかつた。その間に男兒同士で喧嘩が始まつた。

デミとナットと二人の義士が、敵に打掛かつて行くくと、トムはテーブルを小楯に、盗んだ小饅頭をドン／＼叩き付ける。丁度小饅頭の弾丸のやうに堅く出来てゐたので、投げ付けるには極都合がよかつた。此彈藥彈丸の續くうちは、敵も優勢であつたが、最後の饅頭が手を離れるや否や、トムは捕へられて、室から曳摺り出され、見苦しくも廊下に投げ捨てられた。味方は勝鬨を擧げて元の坐に戻り、デミが妹を慰めると、ナットとナン（スミス嬢）とは飛び散つてゐる小饅頭を拾ひ集め、干葡萄をもとの孔へはめ込み、凡てを御菓子皿の上へ

奇麗に並べたので、たいして體裁悪くもなかつた。併し、上の砂糖がなくなつて美しさが消えてしまつたので、今更誰も其に手を出す者は無かつた。伯母さんの聲が階子段の邊で聞えたのでデミが急に、

「もう御暇にしようではないか」と言ひ出した。

「そうだね」とナットも、折角拾ひ上げた風來の菓子をあわて、下へ置いた。伯母様は二人が引上げぬうちに室へ入つて來た。すると、二人の小婦人は受けた無禮の數々を訴へた。伯母さんは、しきりに同情して聞き終つた末に。

「もう／＼こんな人達を招待なさるな。何かあなた達に親切な事でもして此罪亡しをしないうちには、招んで御やりなさるな」と云ひながら三人の犯罪者を白眼めた。

「笑談にやつたばかりです」とデミが言ふと、

「人を厭がらせるやうな笑談は良くありません。デミさんは、妹を虐める事なんぞは覚えまいと

思つたのに呆れてしまつた。こんな優さしい妹なのにな。」

「男の子ツていふものは妹を虐めるに極まつてゐるものだツてトムが言ひました」とデミは小聲で呟いた。

「うちの男兒にはそんな事をさせません。あなた達兄妹二人仲よく遊べなければ、菊ちやんを實家へ歸らせませすよ。」と伯母様は眞面目に言つた。この恐ろしい一言で、デミは妹の方へすり寄ると菊ちやんも急いで涙を引込みました。二人は別々に置かれるのを何よりの不幸と考へてゐた。ナンはあとの二人も叱られなければ不公平だと思ふので「ナットもいけないんですよ。そして一番わるいのはトムなんです。」と評した。

「僕悪う御座いました。」とナットは面を赤らめて詫びた。

「僕はあやまりせん。」と廊下で耳を欬て、聽いてゐたトムが鍵の孔から怒鳴つた。

伯母さんは、失笑しさうになつたのを、我慢して、眞面目に、戸口を指して

「さ歸つてよろしい。が、三人とも伯母さんが許すまで、此少女達と物を言ふ事も遊ぶ事もしてはいけません。よく覺えていらつしやい。そんな愉快をうける價值がない人達なのだから、私が禁じます。」

と言つた。

デミとナットは急いで室を出ると、廊下で恥知らずのトムが、悪口を言つて二人を馬鹿にして、もう一所には遊ばぬと言放つたが、その誓も僅十五分間位しか續かなかつた。菊ちゃん、舞踏會の不成功だつた事は諦めたが、兄さんから離された辛さを感じて、兄様があんな所行をなさらなければよかつたのにと歎いた。ナンはむしろこの出来事を悦ぶらしく、三人に對つては、ツンと澄して相手にせぬ風をした。

男兒達は直に閉口して、仲直りがしたくなつた。

菊ちゃんは遊んだり御馳走を作つてくれないし、ナンは滑稽な眞似をして笑はせてくれないし、おまけに伯母様迄が無禮を受けた婦人の一人と思ふらしく三人には、物も言はず、遇つても見ぬ振りで通り過ぎて仕舞ひ、物を頼みにいつても忙しいからと言つては何もして下さらなかつた。伯母様の慈愛からかく遠ざけられて、三人は、日中に太陽が没した程に暗い淋しい心持ちになつた。

此變つた有様が全三日續いた。三人は、もう辛抱がしきれなくなつて、此日蝕が無限に續いては大變だと、伯父様の處へ相談やら懇願やらに出掛けていつた。伯父様は、内々指圖をうけて居られたものか、斯く／＼したらよかろうと造作もなく智慧を授けて下さつた。ところが、三人とも少しも怪しまず、その忠告を有難く受けて、その通りに實行した。

先、三人ながら屋根裏の室へ密かに退いて、遊び時間を利用しては、或る不思議な物を製造し始

めた。糊の要る事が非常に終にエシヤが小言をいふ位なので少女達は何だらうと首を拈つて居た。

ナンは室内の模様を覗きにいつて、も少しで鼻を戸に挟まれさうになつた。菊ちやんは、一同が一所に遊べないで、秘密な事をしたりするのは情ないと言つて歎いてゐた。ある水曜日の晴れた午後ナットとトムは、天氣模様や風の工合を見定めてから、新聞紙に包んだ大きな平つたい物を持つて出て行つた。ナンは知りたくて〜死にさうだと騒ぎ、菊ちやんも焦れて泣きさうになつて居ると、デミが伯母様の室へ、帽子を手にして入つて来て、世にも叮嚀な調子で、

「あの伯母さま、小さい女兒達ひとと一所に、僕達の催す「ピツクリ」會へ御出かけ下さいませんか是非いらつしやい。それは上等のですから。」と述べた。

「ありがたう。喜んで出ませう。貞坊も連れて行かなくてはなりませんか……」と伯母様はニコ

ニコして答へた。デミは、雨のあとの日光程にその笑顔をうれしく感じた。

「是非連れていらつしやい。小馬車が小さい女兒達にと支度がしてあるんですが、伯母様は歩くのを御構ひないでせうね。」

「歩くのは大好きです。ですが眞實に私がいつても邪魔にならないの。」

「え、大丈夫！ どうか來て下さい。伯母さんが來て下さらないと、會がつまらなくなります。」

とデミは熱心を顔に現はして述べた。

「ありがたう。」と伯母様はデミに恭しく敬禮をして、さて少女達に向つて、

「さ、皆様を待たせてはいけないから、帽を被つてすぐ出掛けませう。「ピツクリ」するものつて何でせうね」と云つた。

伯母さんの言葉に連れて、皆支度を急いだので五分とかゝらぬ内に、三人の少女と貞ちやんとは小馬車に乗つた。デミが先頭で、伯母様が殿しんがり御

供に犬のキットが随従した。小馬車を曳く、「トビ  
ー」といふ馬は頭に紅い羽の塵拂ほたきを著け、二流の  
旗が馬車の上に翻へり、キットは首に藍色のリボ  
ンを飾り、デミは衣服の襟に蒲公英たんぽぽの花束を挿し  
伯母様は、儀容を増すために日本製の日傘を翳  
した。

少女達は、途中、心がわく／＼して一向落付い  
て居られなかつた。貞ちゃんも、たゞ／＼面白く  
て馬車の外へ帽子を落してばかり居るので、伯母  
さんが帽子を取上げてしまつたらば、今度は自分  
が轉ろげ落ちる支度をやり出して皆を笑はせた。  
催しのあるといふ岡へ到著いて、見渡すと、何  
もなくて、唯草が風に靡いてゐるのみなので、子  
供達は失望した顔をした。併し、デミは莊重な調  
子で、

「さ、皆さん降りて、靜に立つていらしつて下さ  
い、ビックリ會が始まりますから」と言ひ置い  
て、岩陰へ入つてしまつた。その岩の上からは先

刻から、二つ三つ頭が出たり引込んだりしてゐた。  
氣いきを凝らして待つ間程なく、ナット、とデミとト  
ムとが各自一枚の紙鳶ひやくを持つて現はれ出て、三人  
の少女に一つ／＼進呈した。ワツと喜びの聲が上  
がるのを、男子達は制して、可笑しさを堪へた顔  
付で、

「今のはビックリ物ではないンです。」と言ひなが  
ら再び岩の後へ走せ返つて、こんどは鬪抜けて大  
きな紙鳶に黄色で「伯母様へ」と書いてあるのを  
運び出した。

「伯母様まで僕等に腹を立て、小さい人達の肩  
を持つたから、やつぱり紙鳶も御好きだらうと  
思つたんです。」と三人が一所に笑ひ／＼述べた  
之ばかりは、伯母様にもビックリ物であつたの  
で、伯母様は拍手して一同と一所に笑つた。

「これはまあ出来だ。誰が考へ付いたの。」と大  
紙鳶を受取りながら尋ねた。

「伯父様が言ひ出したのです。伯母様も紙

鳶は好きらしいと仰つたから、思ひ切り大きい  
のを作つたんです。」と「デミは謀の當つたのを悦  
ぶ氣に見えた。

「伯父様は私の氣をよく知つていらつしやる。眞  
に之は立派な紙鳶だ事！ この間、あなた方が  
紙鳶上げをしてゐた時に、皆で羨ましがつたの  
ね、菊ちやん達」

「それで僕達が之を作らへて上げたんです」とト  
ムは逆立ちを始めた。之が満足を示す一番好い方  
法とトムは思つたらしい。

「この紙鳶を上げませうよ」と元氣者のナンが言  
ふ。

「上げ方が分らないワ」と菊ちやんが言ふ。

「教へて上げる〜」と男兒達が一齊に叫んで、  
デミは菊ちやんのを、トムはナンのを、ナットは  
賺しく〜ベスちやんのを取つた。

「伯母さん、一寸待つてゐて頂戴。伯母様のも揚  
げて上げますから」とデミが言つた。伯母様を

閑却にして置いて、また御機嫌を害ねてはと氣  
遣つて。

「ありがたうよ。伯母様は一人で出來ますとも。

それに助け手が來たから。」と伯母様が答へた。

成程、岩の彼方から伯父様が可笑しさうな顔を  
して覗いて居た。

伯父様は出て來て、大紙鳶をスッーと揚げると  
伯母様が上手に走り出す、その景色を子供達は面  
白がつて見物した。ちぎに、ありたけの紙鳶が皆  
揚がつて、鳥のやうに空中に浮んだ。誰も彼も驅け  
たり、大聲を揚げたり糸を出したり、たぐり寄せ  
たり、紙鳶が中空に狂ふのを眺めたり、脱げやう  
と糸をグン〜曳くの負けじと抵抗したりした  
ナンは夢中になつて騒ぎ、菊ちやんは紙鳶揚も御  
人形程に興があると思ひ、小さいベスちやんは、  
紙鳶を手離すのを惜んで、大概は膝に載せて、ト  
ムが描いた不思議な畫を眺めて居た。伯母様は大  
得意であつた。紙鳶も持主の氣性を知つて居ると

見え、思ひもかけぬ時にクル／＼廻つたり木に搦まつたり、河の中へ落ちさうになつたりして、終には、高く／＼揚がつて雲の中の一黒點となつた。

一同疲れたので糸を樹や垣に括り付けて、草の上に坐つた。伯父様は貞ちやんを肩にのせて牛を見に行つた。

「こんな面白い事をなすつた事ありますの」とナットが伯母さんに訊いた。

「何年も前に、まだ子供の時分にね一度紙鳶を揚げた事があるそれつきり。」

「伯母様が子供の時を知りたかつたな。必然面白かつたにちがひない。」とナットが言つた。

「悪戯ッ子だつたの。」

「僕は悪戯ッ子好きだ」とトムは態とナンを見たので、ナンは返禮に白眼め返した。

「どうして僕は其頃の伯母様を覚えてゐないんでせう僕小さすぎたのでせうか」とデミが訊いた。

「さうでせうよ。」

「僕の記憶力がまだなかつたんだな。御祖父様が心の働きは次第々に發達するものだつて仰つたから、伯母様の小さい時分には僕の記憶力はまだ發達しなかつたんだ、それで伯母様の様子を覚えてゐないんだ。」

「ソクラテスさんや、そんな事は御祖父様に御尋ねなさい。私にや返事は出来ない」と伯母様は手早くデミの癖を押へる。

伯母様がそろ／＼大紙鳶を下げ始めたので、  
「もう歸るんですか」と皆尋ねた。

「伯母様は歸らなくては。さもないと、あなた方御夕食をもらへなくなる。そんなビツクリ會は嫌ひでせう。」

「今日のビツクリ會はうまく行きましたね」とトムが澄していふと、

「ほんとにね。」と一同が和した。

「何故うまく行つたか分りますか。御客が御行儀が良くて、事をよく運ばせたからでせう。伯母



様の意味が分つて。」

「え」と男兒達は答へて、互に極り悪氣に目を見合せて、紙鳶を肩にして、家路を指して歩き出した。(終)

### 摘 録

## ○フレーベル氏の九原則を

評す

(高島平三郎氏述)

(左の一篇は大阪兒童學會に於て高島氏の講述せられたるもの、載せて『兒童研究』にあり。

フレーベル氏は皆様の御承知の如くに今から百三十三年前獨逸のチューリンギアなるオーベルワイスバッハといふ村で生れ六十三年前七十歳で亡くなつた人で幼稚園の創立者であります。子供の教育に最も大切なる心理學でも教育學でも乃至は兒童心理學などいふ新しい學問は何れもフレーベル氏の亡くなつた後に發達したのであります故氏

の教育説には今日から見れば贊成の出來ぬ間違つた事も少からずあります。併し又氏が全く自己の宗教上の信仰及び哲學上の主義から考へた事で今日の學問に照して符節を合せたやうで眞に敬服することも多くあります。私は今北米合衆國なるマッサチューセツツ洲、クラーク大學總長ジ、スタンリー、ホール氏の擧げられたフレーベル氏の九原則に就いて簡單な批評を試み幼稚園に關係のある方々並びに父母の方がお子さんを御教育なさる上の御參考に供したいと思ひます。

(一) 兒童ハ人類種族ノ發達史ヲ反復ス

これは極めて大切の考でありまして兒童に關する近世の學術はこの原理に由つて大に明らめられたのでありますフレーベルは全く自ら兒童の状態を観察して想像上からこの事を主張したのでせうが前世紀の後半分に於て生物學が著しい進歩を致しまして、その實驗的及び實驗的の結論に據りますと全く此の正確である事が證明せられるのであ